

●ラウエス・ハウス●4月11日～21日「アウシュヴィッツとルターとバッハのふるさとを訪れる旅」



ハンブルクは日曜日から素晴らしいお天気が続いています。日曜の礼拝後、教会の兄弟姉妹たちと散策したニードルフゲヘーゲには、野原一面に色とりどりのクロッカスが咲きほころび、その小さな花々が、「春が来たよ！」と一斉に叫んでいるようでした。

暗い冬のドイツでほとんど太陽の光に当たることのできなかった私は、この時とばかり、昼食後、少しばかりの散歩をエンジョイしています。

今日は、我が家から地下鉄沿いに細長く続くテールス公園を通り、その最終地点である「ラウエス・ハウス」(Rauhes Haus)まで歩きました。今日は皆さんに、この「ラウエス・ハウス」とその創立者ヨハン・ヒンリッヒ・ヴィヒェルン氏のことを是非ご紹介させていただきたいと思います。

(写真、クロッカス、吉野照雄さん撮影)

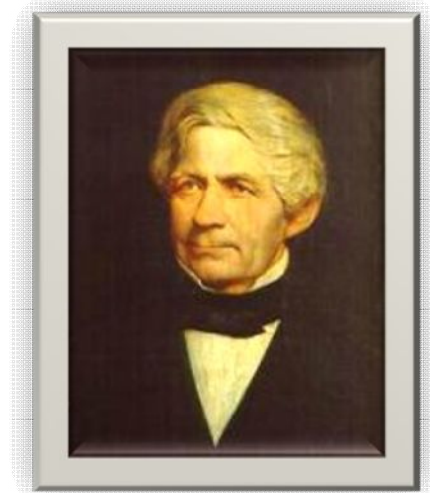
---

●ラウエス・ハウス

「ラウエス・ハウス」とは、「粗末な家」という意味です。

「ラウエス・ハウス」は、1933年、偉大な教育者、信仰者、教会改革者であったヨハン・ヒンリッヒ・ヴィヒェルン(J.H.Wichern,1808—1881、写真右)が建てた、「子どもの家」(Kinderheim)のことです。

当時のドイツは、労働者階級の人々が安い賃金と重労働の苦役にあえいでいる時代でした。その中で、共産主義と無神論思想が広まってきました。ハンブルクの「貧民地区」では、家族4人がひとつ毛布にくるまって寝なければならない廃品回収業者もありました。15~16才の娘たちは売春をしていました。多くの子ども達は裸かボロ布を紐で結んで身に着けていました。学校にも行けず、もちろん教会にも行きませんでした。粗野で盗みをし、小さいうちから酒で酔う子どもたちであふれるこの地区は、「悪党の地区」と呼ばれました。



大学で神学を学び終えたばかりのうら若きヴィヒェルンは、この現状を目の当たりにし、1833年2月25日のハンブルク教会日曜学校教職者の大会で、この現状を報告し、教会が援助をするべきであると訴えました。彼の熱意は当時ハンブルクの大主教であったカール・ズィーフエキングの心を動かし、ズィーフエキングは、ホルン(Horn)地区に持っていた小さなわらぶき小屋をもつ広い庭園を提供しました。倒れかかったその小屋は、昔から「ラウエス・ハウス」(粗末な家)と呼ばれていました。

1833年12月には、ヴィヒェルンの家族と共に、5才から12才までの12人の子どもたちがそこに住むようになりました。ヴィヒェルンの教育の基本は、「赦し」と「信頼」でした。子どもたちに神の無条件の赦しを説き、読み書き、家事、野菜作り、大工仕事を教え、聖書を読み、賛美し、祈りとともに働くことを教えました。ラウエス・ハウスの中では、沢山の行事も組まれました。子どもたちがそれぞれの独創性をもって自分たちでその会を作り上げ、互いに仕え合うことを学ぶためです。



「ラウエス・ハウス」での待降節の祈り会では、アドベント期間中、毎日一本ずつろうそくをともしました。ろうそくの火は、「世の光」(ヨハネ8:12)の象徴でした。その後、壁はもみの木の枝で飾られるようになりました。常緑樹のもみの木の葉は、「永遠」を表わします。1860年には、後にヴィヒェルンがベルリンに設立した「テゲル子どもの家」に、もみの木の枝でクランツ(輪)が作られ、そこに4本のろうそくが置かれるようになりました。これが、

今のアドベント・クランツの原型となりました。(写真左、「ラウエス・ハウス」の前で遊ぶ子どもたち)

「ラウエス・ハウス」の働きは、その後、とりなしの祈り会、印刷所、出版部と広がっていきました。そしてルターが「95カ条の提題」を打ち付けたヴィッテンベルクの教会で行われた教会デー(Kirchentag)において、それまで教会が触れようとしなかった貧困者、弱者の救済のために、奉仕とみことばを持って、神の愛を実践しながら伝道する者の共同体である「ディアコニー」形成の必要が訴えられました。

「愛は私にとって、信仰と同じように大切なものです。神のことばであられるキリストは、そのすべてをもって神の愛を証しなさいました。ですから、神の召命を受けた者が、この激動の社会の中で、今、祭司として全身全霊をもってキリストの愛を実践してゆく国内伝道が必要なのです」。

1848年のその日、集会の参列者全員が賛同をあらわすために立ち上がりました。

その後、プロテスタント教会の「ディアコニー」の働きは世界中に広がってゆき、今なお貴重な働きを続けています。

## ●4月11日～21日「アウシュヴィッツとルターとバッハのふるさとを訪れる旅」

締め切りを3月23日に延期いたしました。最低人数に未だ達していないためですが、旅行はいずれにしても遂行いたします。以下、最後のアピールをさせていただきますね。(写真、ベルリン、ブランデンブルク門)

1. アウシュヴィッツを訪れるツアーは、多分今回のAKMM企画のものぐらいしかないのではないかと思います。ですから、今回がアウシュヴィッツを訪れる絶好の、あるいは唯一のチャンスかもしれません。ここはホロコーストという人間の原罪の極みと、神の選民が受けた恐ろしい迫害の現実を知るための出



来る、世界で唯一の場所だと思っています。また、アウシュヴィッツは、ツアーでもなければそう簡単に訪問できるところではありません。私自身、ポーランドの隣国ドイツに住んでいながら、一人では簡単に訪問できないところです。

2. ベルリンの「ペルガモ博物館」の圧倒的な『ゼウスの神殿』は、まさしくサタンの王座を象徴しているかのように。『ミレトの市場』や、バビロニアの『シュメール門』など、見る者を圧倒する遺跡の実物が、ここに展示されています。そして、ここにあるすべてから、文明の王、つまりこの世の支配者の力の縮図を見ることができるのです。神はしかし、そのとき、「光が闇の中から輝き出よ」と、キリストをその真っ只中にお与えくださいました。闇の力の大きさを見ることによって、逆に私たちは、その中で働かれる神の愛(ヨハネ 3:16)とそのみ業の意味の深さを知ることができると思っています。

3. ルターのふるさとを訪れるのは、15世紀に渡って腐敗していった教会に大きなメスを入れた偉大な神のみ業に触れるチャンスです。私たちの今の教会があるのは、この「宗教改革」のお陰なのです。「宗教改革」は神のマスタープランの、ひとつの大きなポイントです。

4. バッハは、ルター派の信仰を持ち、教会音楽の頂点を築いた人です。「神よ、助けたまえ」と楽譜の冒頭に記してから作曲を始め、最後に「神にのみ栄光あれ」と、すべての栄光を神に帰したバッハの音楽は、彼の前にも後にも、どの音楽家も越えることの出来ない素晴らしいものです。

5. 旅行費用がイスラエルツアーなどより高いのは、今の異常なユーロ高と、それに加えてドイツのホテルがとても高いためです。でも、AKMM のツアーは、ゆったりと旅の疲れを癒すことができるように、高級ホテルを予約しました。ですから、個人で行くことを考えると、これでもかなり安い金額になっています。

以上をご参照の上、参加ご希望の方は、3月23日までに事務局までお申し込みください。（詳細は、前号の添付ファイルをご覧ください。）

---

それでは、また2週間後にメルマガをお送りさせていただきますね。  
主の愛と恵みが皆様と共にありますように！

工藤篤子